

## 学位論文要約

### ジョン・デューイはどのようにして宗教哲学者なのか

——アメリカ哲学における宗教・政治・消費という論点をめぐって——

谷川嘉浩

「アメリカの指導者であり、師であり、良心だった。ある世代にとって、デューイが口を開くまでどんな問題も明確にならなかったと言っても過言ではない」と、ヘンリー・コマージャは、ジョン・デューイについて語った。その影響力にもかかわらず、「ある世代にとって」という言葉からわかるように、死後しばらく、ジョン・デューイの哲学的業績は顧みられなかった。その傾向を覆したのが、ネオプラグマティストによる再評価と、『ジョン・デューイ著作集』の刊行である。それらを端緒として、デューイ哲学の良質な研究が、狭義の哲学に限らない様々な領域で登場していく（デューイ・ルネサンス）。だが、デューイが様々な著作で断片的に語ることの多かった「宗教」という主題については検討が遅れていた。それに対して、アカデミアのデューイ宗教哲学に対する関心を惹起したのは、ロックフェラーやシェアといった研究者の浩瀚な研究書である。しかし、これらは、デューイの宗教論の経年的変化や同時代の言説との関係などを明らかにする成果を上げたものの、諸概念について批判的な再定式化をし、それらの関係を解明するという基本的手続きを欠いており、デューイの宗教哲学を「民主主義」に還元する説明や、仏教思想などとの印象論的な比較が行われることとなった。

そもそも、デューイ宗教哲学の基本構造を解明する必要があるのだ。そうでなくては、その体系内でどんな役割を果たすかを見極めることなしに個別の概念を抜き出すことになりかねず、また、個別に概念を取り出すことが、デューイの哲学の観点から妥当と言えるのかを判断できないからだ。従って、本論では、デューイの宗教哲学の構造を解明することに第一部全体を割り当て、デューイ宗教哲学の主要な概念を検討し、その上で、彼の他の主題との関係を考察し、同時代の知識人との体系的な比較を行う。

第一部では、デューイの「宗教的経験」論の構造を明らかにし、そこで用いられる基本概念の内実と背景を再構築する。その上で、第二部では、宗教論から直接つながる論点として、「公共性」をめぐる議論に注目し、大規模かつ複雑になる社会における自律性・政治参加・知的態度の可能性をデューイがどのように提示したかを明らかにする。さらに、第三部では、「消費社会」到来以降のアメリカ社会や人びとの生活に関する議論に軸足を移し、生のあり方や社会をめぐるデューイの構想を検討する。つまり、円を三つ重ねるように、宗教哲学から、公共哲学、そして、社会哲学へと踏み出すように本論は構成される。

第一部「ジョン・デューイの宗教哲学」では、ジョン・デューイの宗教に関する著作『ある共同の信仰(*A Common Faith*)』(以下 CF と表記)を中心に扱い、その宗教哲学的側面を検討していく。

第一章では、宗教哲学の基本概念——「信仰」「共同性」「自然的敬虔」など——に注目し、その基本的構想を検討する。その考察の導きとするのが、さしあたり個人のものであるはずの信仰が、人類規模の共同性を持ちうるという CF 終盤の示唆である。こうした「個人と人類」という共同性のギャップがどのように埋まりうるのかを検討することで、CF が展開している「共同性の哲学」の内実を解明していく。そこで彼の構想は、「人類」規模にまで拡大する終わりなき共同性への想像として描かれることになる。本章の末尾では、動物やロボットといった存在者が「人類」にカウントされる余地があるのかどうかを、哲学者 D. デイヴィッドソンの「歴史」概念を借りて検討することで、CF の理論的可能性を探索する。

第二章では、第一章で扱われた態度転換に焦点を当てる。これは、「回心」や「覚醒」として知られる経験であり、チャールズ・テイラーが、W. ジェイムズを参照しつつ、近代において前景化する必然性のある社会現象として取り上げた体験でもある。本章では、デューイが CF で神秘的経験を経て回心を体験した人物の手記を検討した際に、文化人類学者のような視点を採用していたことに注目し、デューイ哲学が、自己の経験を解釈する際に付きまとう「不安定性」をベースに組み立てられていることを明らかにしていく。

第三章では、前の二章でも中心的な役割を果たした「想像力」概念を取り扱う。想像力の概念史を通覧した上で、初期著作から後期著作に亘って、デューイの想像力概念を検討することで、彼が想像力の創造性を強調したロマン主義の知的遺産——特に S. T. コールリッジの発想——を取り入れながら自身の理論を発展させたことを明らかにする。ただし、デューイの想像力概念では、ロマン派詩人が時折示した神秘主義や超自然主義の色彩が明確に落ちている。本章の終盤では、日常的にその語彙を用いるにもかかわらず、説明を求められると窮するような「想像力」の機能が、定評あるロマン主義文学の研究に基づいて説明される。

第一部では、デューイ宗教哲学の主著 CF をベースに、その基本概念やそれらの関係を中心とした議論を行ってきた。第二部「ジョン・デューイの公共哲学」では、話題を「公共哲学」ないし「政治哲学」にまで拡大し、第一部で萌芽的に扱った論点を持つ含意を検討していく。

第四章では、ドイツからアメリカに渡り、その後の生涯でアメリカとの関係を失わなかった精神分析家エーリッヒ・フロムの宗教哲学に注目する。彼の宗教論では、フロイトと重ねる形でデューイの宗教哲学が高く評価されている一方で、実質的に影響を受けているはずの箇所では、デューイへの言及が脱落していることに注目する。本章では、フロムとデューイが議論の手順と、基本的な批判対象を共有していたにもかかわらず、「自律性」

を達成するための戦略が対照的であることが示される。その結論から示唆されるのは、CFは、公共哲学の観点からも読み解かれねばならないという方向性である。

第五章では、「デューイ＝リップマン論争」として主題化されるほどに重要視されている、政治評論家のウォルター・リップマンとデューイの思想的対立を取り上げる。本章では、最初に、通説的な論争理解が、それが伝記的事実としても、思想的理解としての的を外していることが確認される。その上で、リップマンの『世論』や『幻の公衆』といった政治哲学上の古典が、ウィリアム・ジェイムズやデューイの心理学をベースにしていたことに注目することで、リップマンとデューイが「先入見」の取り扱いにおいてすれ違っていたことが明らかとなる。リップマンは、デューイ（およびジェイムズ）を誤読したために、自縄自縛の議論を展開したのだが、デューイの政治哲学は同じ轍を踏んでいなかった。デューイ政治哲学の可能性を示す上で鍵となるのが、「探偵」「衣服」「文明」といった修辞を用いて展開される「陶冶された素朴」概念である。

第六章では、先行研究がデューイ公共哲学を取り扱う際に、「公共性」と対になる「プライバシー」について検討が少なかったことに目を遣る。先行研究は『公衆とその諸問題』に注目するばかりで、CFの公共哲学的側面に向ける関心が乏しいのである。本章では、まず、同書の「局外から介入する公衆」という彼の発想を検討した上で、現代の問題関心からするとプライバシーに対する防波堤の欠如が問題視されることを示す。さらに、CFで提示されたプライバシー概念を検討し、それをリチャード・ローティやジョン・ロールズの構想と重ねる。それによって明らかになるのは、人びとが共生し、問題に対して協働的にアプローチするための安定的な足場をCFが提示しているということである。

第一部では宗教哲学的観点から、第二部では公共哲学的観点から、ジョン・デューイの思想を掘り下げてきた。そして、第三部「ジョン・デューイの社会哲学」で焦点を当てるのは、大量消費社会や大都市化などの社会変動を目撃しつつある時代に試作した哲学者としての側面、つまり、彼の社会哲学的側面である。

第七章では、第八章以降の議論の橋渡しとして、アメリカ史家のダニエル・ブーアステインの議論を手がかりに、アメリカでの消費社会成立の経緯と消費社会の構造を明らかにしていく。彼の理論が本論にとって有意義な参照点となるのは、彼がプラグマティズムからの影響を公言し、リップマンを度々参照しているからだ。シカゴ万博が提示した消費社会の未来像が現実化された果てに、消費者と産業が互いに結託しながら形成した「イメージ」の抜け出せない海があり、その社会像は「アメリカ」と切り離せない仕方で捉えられる。これが本章の概略である。

第八章では、消費社会では「理想」が機能不全に陥り、「イメージ」がその役割を代替するというブーアステインの立論に注目する。スコット・フィッツジェラルドのような作家も同様の発言をしている点で、彼の気づいた問題は根深いものだった。興味深いことに、まさに消費社会成立後に、デューイは「理想」概念を再構築している。本章では彼の「理想」概念の起源として、社会福音主義と、C. S. パースの議論があると指摘し、詳細

に検討することで、その社会哲学的な含意を探っていく。その結果明らかになるのは、神学者 R. ニーバーの目指した「自己超越」というプロジェクトを彼以上に首尾よく遂行する方途を、デューイが提示していることである。

第九章では、アメリカ建国以来問題となっていた「自己統治のジレンマ」を主題的に論じる。それは、人民主権を原則としては立てている社会にありながら、人びとが知悉し判断すべきだとされる事柄の複雑性や広範性に、人びとの能力が及んでいないという事実由来している。リップマンは、誰もすべてを知り十全に判断することはできないという有限性に向き合うべきだと主張し、トマス・ジェファースンこそが人民主権という機能しえないフィクションの創作者だと仄めかす。しかしながら、リップマンと状況認識や処方箋において大筋に合意するデューイは、むしろ意識的にジェファースンに立ち返ろうとする。デューイによる再評価の要点は、「自然権」をはじめとする彼の平等主義的なレトリックが、自己や社会の行動を道徳的に拘束する「理想」として働くだけでなく、人民への「信頼」という民主的社会の前提を導入するものでもある、ということにある。

結論では、本論全体を振り返りながら、他ならぬ「宗教」に焦点が当てられ、それが他領域の彼の思考に波及していったことの哲学的含意が検討される。古代ギリシア哲学の影響下で展開された西洋哲学の伝統は、古代ギリシア哲学が、当時の宗教的習慣の内実を引き継いでいたことにある。